

イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

○ 被害と発生生態

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが伝搬するウイルス病（病原ウイルス：イネ縞葉枯ウイルス(RSV)）である。当ウイルスはヒメトビウンカで経卵伝染するため、次世代以降も永続的に伝染する。感染したイネは分げつが少なく、生育が抑制される。生育初期の感染では、新葉がこより状になったまま伸び、垂れ下がって早期に枯れ込む。生育中後期の感染では、黄緑斑と主脈に平行した黄緑色の条斑を生じ、穂は出すくみ、穎は褐変する。

ヒメトビウンカは、山口県内では年間5～6世代を経過し、休耕田等の雑草や草地で越冬する。幼虫態で越冬した後、4月頃に成虫となりムギやイネ科雑草に産卵する。次世代成虫は5月下旬～6月上旬に発生しイネに移動する。

近年は長距離移動も指摘され、平成20年6月上旬には中国大陸からヒメトビウンカが多飛来した。この群のウイルス保毒虫率が高かったため、山口県中西部を中心に本病が発生し、一部の地域では被害が発生した。

○ 防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

- ・遅植え（6月植え）を行う。
- ・ヒメトビウンカの越冬場所である休耕田のすき込み、畦畔雑草の刈り取りを行う。
- ・ヒメトビウンカの増殖源はイタリアンライグラス、ムギ類等であり、これらの周辺ではイネの育苗を避ける。

（イ）薬剤防除

- ・箱施用剤によりヒメトビウンカの防除を行う。
- ・5月下旬～6月上旬には中国大陸から多飛来する可能性があるため、発生予察情報に注意し適切に防除する。



ヒメトビウンカ(上:雌 下:雄)



イネ縞葉枯病による葉の症状と穂の出すくみ